

## コラム：新植夏植におけるイネヨトウの防除対策について

県内全域のさとうきび圃場において、イネヨトウによる被害がみられます。生育初期の被害軽減のため、新植夏植時における粒剤施用等による防除対策を徹底しましょう。

### 1 発生生態および被害

- (1) 沖縄では年5～7世代を重ね、幼虫は周年を通して発生する（図1）。
- (2) 卵は葉鞘の裏側に卵塊で産み付けられ、1雌当たりの生涯産卵数は400～700卵に達する。幼虫は葉鞘の外側から孔を開けて食入し、生長点を加害して芯枯れを起こす（図2）。
- (3) 初期被害は圃場周辺部で見られ、圃場内でスポット状や畝に沿って被害が拡大する。被害が集中的に起こるため、生育初期に加害されると坪枯れを起こすこともある。
- (4) 被害圃場及びイネ科雑草地が発生源となり、新植圃場に侵入する。



図1 イネヨトウ幼虫



図2 芯枯れを起こしたさとうきび

### 2 防除対策上注意すべき事項

- (1) 植付時
  - a 全茎苗は剥葉し、メイチュウ類の被害芽子のある苗は使用しない。
  - b 圃場内外のイネ科雑草は本種の発生源となるため、除去する。
  - c 植付時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤（粒剤）を選択し、植溝施用する（図3）。
- (2) 生育初期
  - a 周辺圃場における本種の発生有無を確認する。
  - b 芯枯れが発生した場合は、茎を地際部より深く切り取り処分する。
  - c 食入初期の幼虫を対象に薬剤防除を行う。
  - d 培土時には土壌害虫の防除を兼ねた薬剤（粒剤）を選択し施用する。
  - e 被害の多い地域では、薬剤による一斉防除を行う。



図3 粒剤は散布後、土壌混和する